

3. 経 営 成 績

(1) 当中間期業績等の概況

- 業績の状況

わが国経済は、一部の産業で設備投資が増加するなど緩やかな回復の動きが見られますが、個人消費は依然として伸び悩んでおり、引続き厳しい事業環境が続いております。一方、米国、欧州の景気が依然堅調に推移しているほか、アジア経済も不透明感はあるものの回復に向かいつつあります。このような状況の中で、当社は積極的な営業活動を展開し、連結の売上高1,418億円余をあげました。

事業種類別の売上高は下記のとおりであります。

セルフメディケーション事業	104,422百万円余
医 薬 事 業	37,377 "
合 計	141,800 "

また、主力製品の売り上げ動向は次のとおりであります。

先ず、一般用医薬品などを中心とするセルフメディケーション国内事業では、ドリンク剤の「リポビタミンD」が、薬局ルートの低迷を規制緩和によって開放された新ルートの伸びでカバーし、全体では約6%の増加を示しました。また、前期に発売した「リポビタミンDライト」や新発売品「リポビタミン8」などの「リポビタミンシリーズ」も売上増に貢献しました。壮年性脱毛症における発毛剤「リアップ」は、爆発的な新発売人気で異常な程の売り上げを記録した前年同期に比べ減少しましたが、概ね計画どおりの売り上げとなりました。これらに続く主力製品の風邪薬「パブロンシリーズ」は微減、胃腸薬は微増でした。また、解熱鎮痛剤「ナロンエース」、水虫薬「ダマリン」、便秘薬「コーラック」などは売上増に寄与しました。

家庭用品および公衆衛生用剤につきましては、捕殺虫剤の販売中止などによりマイナスでした。

医療用医薬品を中心とする医薬事業は、薬価基準の引き下げに加え、競合品との競争激化などの厳しい状況の中で善戦いたしました。主力のマクロライド系抗生物質「クラリス」は微増、末梢循環改善剤「パルクス注」は微減でした。なお、医薬事業の売上高に含まれているクラリスロマイシンなどの海外導出品のロイヤリティ収入は円高の影響などもあって落ち込みました。

海外におけるドリンク剤の売上高は、オソサパ大正（タイ）の新製品投入もあってアジア市場では上伸びしましたが、欧米市場は横ばいでした。

利益面につきましては、前記のように主力の国内売り上げが微増にとどまる一方で、海外ベンチャー企業との共同研究開発費の増加や販売促進費などの経費増があったため、経常利益は426億9千4百万円余にとどまりました。

また、退職給付会計基準に基づく会計基準変更時差異173億円余の半額を特別損失に計上したため、当期純利益は196億3百万円余となりました。

連結キャッシュ・フローの状況

当期のキャッシュ・フローは、営業活動によるキャッシュ・フローが192億円余、投資活動によるキャッシュ・フローがマイナス141億円余、財務活動によるキャッシュ・フローがマイナス167億円余となり、その結果、現金及び現金同等物の期末残高は、192億円余と前期末に比べ116億円余減少しました。

(2) 通期の見通し

下期は一段と厳しい事業環境が続くことが予想されますが、引き続き積極的な営業活動の展開、研究開発の促進および経営全般の効率化などを推進してまいります。

この結果、通期の連結業績は次のとおりとなる見通しであります。

(平成12年3月期比)

売 上 高	2,810億円 (2.1%増)
経 常 利 益	774 " (13.9%減)
当 期 純 利 益	347 " (31.6%減)